はじめに

――少し長めの自己紹介もかねて

故障だらけの「不良品」に生まれて

発達障がいの僕が5歳までどうやって生きてきたのか。思い出そうとしても、頭の中は暗いトンネルのようなものにすっぽりと覆われ、断片的にしか思い出せません。

霧がかかったような記憶にあるのは、電車に例えるなら、２００６年３月に製造されたもののトラブルが頻発し製造元に返され、修理後も故障ばかり起こし、たった8年で廃車になった「E３３ー系」のような僕で、部品が故障しないか気にしながらかろうじて走るような毎日のことです。とても恐ろしく、混沌とした世界。

僕を見て、周りの人はこう言います。

「何でそんなことをするんだ？」

「何度言ったら分かる？」

「何でみんなと同じことができない？」

「どうして普通のことができない？」

どうして？　何で？　普通って何？

そんなことを言われても分からないものは分からない。僕は何も答えられません。それに僕は幼い頃から人の目を見るのが苦手で、話している人の目を見られません。うつむいて黙っていると、聞いてきた人たちはバカにされたと思うのか、ますます怒り出します。

僕だって知りたいです。自分のための正確な手順をまとめたマニュアルを。

僕だってなりたいです。みんなみたいに、色々なことができるように。

僕は小さな頃から鉄道やロケット、航空機といった乗り物やミリタリー、炭鉱やダム、トンネルといった土木建築の世界に対して、異常なまでの興味を持ち続けてきました。

制御されていることの美しさと事故が許されない世界。失敗を乗り越えた先にある整然とした完璧な秩序。

なぜここまでこだわるのか、いまだに自分自身でも分かりませんが、もしかしたら、混乱した自分の求める正解がそこにあるからたまらなく魅了されるのかもしれません。

英名門パブリックスクール～東大入学が前提の家系に生まれたのに幼稚園すら2時間で中退した僕

ここで僕の自己紹介をします。

僕が生まれた家は、父方が4代続けて東大を卒業しています。たぶん日本でも珍しい家系ではないかと思います。

父は当時の日本人では3人目という、英国パブリックスクールの超名門のイートン校を卒業。東大法学部を経て、職業は弁護士の頂点といわれる渉外弁護士です。イートニアンの伝統で、父は母の妊娠が分かるとすぐに、男子が生まれる前提でイートン校の受験資格を登録したそうです。僕は母のお腹の中にいるときからイートンを出て東大に入学することが当然と望まれ、この世に生まれました。

ここから小学校に入学するまでのエピソードは、母から聞いたこと、それから、混沌とした日々で断片的に覚えていることを組み合わせて書きます。

幼少期の僕は、歩きはじめが8カ月と異常に早いものの言葉は遅く、落ち着きがないため目

が離せず、ちょっとしたことで怒ると一時間もその場を動かない子だったそうです。

10カ月のときにはすでに電車が大好きで、母方の祖母から1歳の誕生日にもらった雑誌『鉄道ファン』をむさぼるように見ていたといいます。雑誌がボロボロになるまで毎日夢中で眺めているにもかかわらず、発する言葉は「がたんがたん」や電車の名前ばかり。2歳を過ぎてしばらくしても単語を2つつなげる二語文が出ず、両親を心配させました。

3歳を迎える年に、都内のインターナショナルスクールの幼稚園に入園しました。預けられた瞬間から協調性のかけらもなく、叫んで暴れて手がつけられない僕。母は園長先生から「この子は病院に連れていくべき」と言われ、入園してわずか2時間で僕は中退させられました。

当時、わが家は東京都千代田区に越したばかりだったため、母は区の制度や教育環境などが何も分からず、途方に暮れたらしいです。

発達検査を受けようと病院に問い合わせるも、予約はどこも翌年までいっぱいで断られ続けました。今でこそ発達外来のあるクリニックは増えていますが、当時はまだ極端に少なく、どこも一年以上待つことが当たり前だったということでした。

検査も受けられず、幼稚園にもいけず、困り果てた母は、自宅を訪問した千代田区の保健師

さんに相談します。すると、公立の保育園ならば難しいお子さんでも受け入れてもらえるのではとアドバイスされ、区立のある保育園に申請をし、僕は年少組の終盤に近い時期に途中入園しました。

年中の誕生日には、母方の祖父からノートパソコンを買ってもらい、分からないことは「ＧＯＯＧＬＥ先生」で調べるようになりました。僕は言葉は遅かったものの、３歳過ぎには親のパソコンを勝手にいじり、いつの間にかキーボードのひらがな入力を覚えていました。

誰から教わるわけでもなく。パソコンを使い、「鉄道模型シミュレーター」や「Ａ列車で行こう」というシミュレーションゲームで路線を設計して、鉄道会社を経営して楽しんでいた僕。しかし、保育園での日々はとにかく苦痛でした。

登園は歩いて５分もかからない距離なのに、毎日道路に寝転び泣き叫び、母は僕をひきずり30分以上かけて連れていっていたそうです。

もちろんクラスでは協調性ゼロ。床に転がり、もしくは暴れて脱走しては連れ戻される毎日。僕自身はあまり覚えてないのですが、偏食で給食も食べず、お昼寝の時間は興奮して布団の上を走り回っていたらしいです。誰も手がつけられない「超問題児」でした。

同じクラスには、体が大きくて興奮すると椅子を投げつけてくる子や、とつぜん血が出るくらいの力でひっかいたり、歯形がつくくらい強くかみついたりする子がいたのです。

でも、僕には相手に言葉で伝える会話力がありませんでした。泣きわめくばかりの上に、常に先生の手を焼く存在だったので、よく怒られました。

トラブルだらけで、母も針のむしろにいるような毎日だったそうです。でも誰にも相談に乗ってもらえず、絶望していたある日、園から「発達支援センターに相談してもらわないとこちらも困ります」と言われ、千代田区の発達支援センターに通うことになりました。２００６年のことでした。

物心がついてから理解したことですが、２００６年は新しい特別支援教育の法律が可決・成立した年でした。２００７年から全国の小・中学校で特別支援教育が正式に実施されることになり、僕は小学校入学後、そうした新しい仕組みの教育を受けました。詳しくは後で述べますが、当時は学校側も試行錯誤の時期だったこともあり、僕は特別支援学級で大いに苦しむことになります（中学校では工藤勇一先生に出会い、救われるのですが）。

話を保育園時代に戻します。保育園に言われ出向いた発達支援センターでは、まず発達検査をすることになりました。

しかし、その頃には僕はすでに保育園で先生たちに怒られまくっていたため、知らない大人を見ると、「また僕を問題児扱いする人があらわれた」としか思えませんでした。

説明もなく突然はじまった検査に、暴れて、逃げて、ふざけて意思疎通はゼロ。

こうして返ってきた検査結果は「言語・動作共に知的障がいありの重度の自閉症」というもので、なおかつ「この結果は信頼性に劣る」という追記つき。

その後、発達支援センターでは週に一度のペースで療育を受けましたが、先生を信頼せず、どれだけ通っても成長する気配はなかったそうです。

小学校入学を控えた時期になると、母は発達支援センターから「幹之佑くんは重い障がいなので、生涯を通じて国から支援を受けられる環境に置かれたほうが彼のためです。特別支援学校への進学を……」と言われます。

でも、母は「今はとても難しい子ですが、必ず成長する子です。家では意思疎通もできますし、死ぬまで国から保護されないと生きていけないとはとても信じられません。どうか区立の

小学校に進学させてください」と必死でお願いしたそうです。

園では大暴れするものの、家では落ち着いて過ごし、年長の頃には長時間飛行機に乗ってロンドン旅行ができたこと、ときには親を思いやる言動を見せる僕に、母は「この子は必ず成長できる。心から信頼できる先生に出会えたら、学校という場で必ず伸びる」と信じていたそうです。

しかし、「できないことのほうが多い」「現実を見ない単なる親の欲目」と受け止められ、なかなか希望は通らず、母は夜も眠れないくらい苦しんだといいます。そして、最後の望みとして、僕がいつも区の検診を受けていた逓信病院の小児科部長の鈴木淳子先生のもとに相談にいきます。

先生の診察を受けるために、僕は母と3時間以上、ひたすら待合室で待ち続けたのを覚えています。

診察室に入ると、鈴木先生は最初に僕になぜ発達検査を受けなくてはならないのか説明してくれました。その説明を聞き、誰のためでもなく、自分のために信頼性のある検査結果が必要なのだということを初めて理解することができました。

結果はＩＱ－２０程度、知的には問題なく、広汎性発達障がいの傾向ありというものでした。

この結果をもとに、鈴木先生は支援センター宛てにお手紙を書いてくださいました。ようやく信頼性のある検査結果を千代田区に提出できました。

ここまで読んで想像している方がいるかもしれませんが、西川家はありがたいことに経済的には恵まれているほうだと思います。おかげでいろんな病院にもかかることができました。

でも、そんな家でも、発達障がいの僕が生まれたことで、一家で地獄の苦しみを味わいました。どんなに両親が頑張り、成長に少しでもよいと聞いた治療法や教育、療育にお金を費やしたとしても、「しつけのなっていないダメな子」だと忌み嫌われ、世間から拒絶されるわが子。両親とも「障がいは自分のせいだ」「息子と夫（妻）に申し訳ない」と互いに思い詰めていました。

母から、僕と二人、あるいは一家で心中しようと何度も考えたと、告白されたこともあります。

僕のような発達障がい児は社会に迷惑をかける存在であり、僕も両親も、死ぬまで世の中に申し訳ないという罪悪感と絶望を抱えて生きていかないといけない。発達障がいの「根っこ」にある苦しみは、お金で解決できるものではない。僕たちは、一家で苦しみ、命を絶つ寸前まで苦しみ抜いたからそう思います。

２００６年の特別支援教育の法改正を受け、千代田区では千代田小学校に知的障がいの子ど

もを対象とした特別支援学級を設置しました。そして、僕が入学する２００９年度からは、千代田小学校をモデル校として、先に設置していた知的学級に情緒障がいの子どもも在籍させる「知的・情緒学級」を開設しました。

現在の公立学校の特別支援学級は知的障がいと情緒障がいなどに分かれていることが主流ですが、当時の千代田小学校では一つにまとめた設置でした。

鈴木先生の手紙をもとにした区の就学会議の結果、僕は、その特別支援学級に、「情緒」の特別支援教育を受ける最初の一人として入学することになりました。今では当たり前の「通級クラス※」も、この時点ではまだ千代田区には存在しませんでした。

知的と情緒で必要な支援は異なります。母は、僕がクラスでトラブルを起こさないか不安をもったそうです。

しかし、当時はほかに選択肢もなく、僕が成長して通常学級に在籍したい場合は、移動が認められることを確認し、入学を決断したということです。

※通級クラス：障がいをもつ子どもが通常の学級に在籍しながら、学習に困難がある授業のみ特別支援学級に通う仕組み。

特別支援学級での2年間～通常学級への移動。6年間でライフポイントはゼロ寸前

千代田小学校の特別支援学級は、通常学級が2組あったので、「3組」と呼ばれていました。ちなみに今も3組はあるようですが、この本で紹介する話はすべて僕が在籍した10年以上も前のことで、現在の制度や支援のあり方とは大きく違うことをご承知ください。ストレートな表現も出てきますが、学校や多くの先生方には感謝しております。

僕は小学校に入っても、まだうまく話せず不器用で字を書くのもやっとでした（タイプ入力はできました。もし字が書けずに苦しんでいる子がいたら、タイプを試してみてください）。

そんな僕でしたが、その頃には興味が鉄道から航空・宇宙にも広がり、ＪＡＸＡのショールームや東大の五月祭の宇宙工学のブースで、衛星の推進装置やロケットエンジンについて熱心に質問し、専門書を片っ端から読んでいる自分のことを「障がい児」、ましてや「無知な子ども」などと認識していませんでした。

それなのに特別支援学級の先生たちに赤ちゃん扱いされることにどうにも我慢できず、毎日教室を飛び出していました。

休み時間に、活発に活動する通常学級の子たちと遊びたくて話しかけても、「誰この子？」「３組さんの子だから。お母さんがかわいそうな子だから仲良くしてあげてねって言ってたよ」と言われます。すると例えようもない屈辱感が胸に広がります。

誰がかわいそうだ！　かっとなって「うるさい、うるさい！」と暴れると、先生たちに怒られて特別支援学級に連れ戻されます。そして母に「幹之佑くんが大変なので、今日はご自宅に連れて帰ってください」と電話がいきます。

僕の入学後、一学期が終わるまで、母は毎日３限の終わり頃になると連れ帰ってほしいと学校から電話がくるので、朝、僕を学校に送り届けた後は、学校の向かいのカフェで過ごすようになりました。今日こそは電話がきませんようにと携帯を握りしめながら、祈っていたそうです。

毎日毎日、携帯に電話がかかるとあわてて学校に向かう母の姿を見て、ただならぬ事情を察したのでしょう。ある日、店長さんが「全品30％引き」と書かれた「ＶＩＰカード」をそっと手渡してくれたそうです。

当時の３組では、文化祭も運動会も音楽会も遠足もすべて通常学級の子たちとは別枠で行動

していました。校内では常に疎外感を感じました。また、在籍する子どもの平均にあわせてプログラムが組まれていたので、僕にとっては内容が幼いように感じられ、渋々取り組むものも多くありました。

僕にはこの場所は合わない。いつまでここに閉じ込められるのだろう。ほかの子にとっては過ごしやすかったとしても、あくまで僕個人にとって、当時の区の制度下の３組は安心できる場所ではなく、僕のような「特別な子」の「隠し場所」に見えていました。

そんなとき、１年生の秋頃に、千代田小学校の校医である「あいクリニック神田」の西松能子先生に出会います。

先生は定期的に学校を訪れ、支援学級を中心に子どもたちの様子を見て、担任の先生や補助の先生からの相談に応じたり、学校や区の支援センターにアドバイスをしたりしていました。母が講演会で西松先生の話を聞いて「校医」という存在を知り、学校を知り尽くされているこの先生ならばきっと私たちの悩みを理解してくださるに違いないと感じ、クリニックを訪れることにしたのです。

西松先生は僕以上に僕のことを理解してくれました。とても人気があって、待合室は座る場

所もないくらい忙しいクリニックですが、先生は僕のたどたどしい話を急かすこともなくじっくりと聞いてくれました。大人は話をまともに聞かないと孤独感を抱いていた僕でしたが、この先生は違う。子ども心にも分かりました。

子どもの頃は、成長につれて診断名が変わることも不思議ではないからと説明され、あいクリニックでも発達検査を受けました。

結果は「ＩＱ１２０程度。得意・不得意の差が大きい。注意欠陥多動性障がい（ＡＤＨＤ）。アスペルガー症候群（ＡＳＤ）の傾向も。興味関心がたくさんあり、気が散りやすく、自己没頭すると周りが目に入らない」。

西松先生は、「３組にいるのがつらい。通常学級に移りたい」という僕の気持ちを尊重してくれました。そして、区や学校の関係者と一年以上かけて何度も会議を重ねてくださったそうです。

その結果、東日本大震災のあった２０１１年の９月から千代田小学校で僕は通常学級に移ることになりました。千代田区の特別支援学級の子どもが通常学級に移動した初めてのケースでした。

もう僕は「特別」ではない。うれしくて母と抱き合って喜んだことを覚えています。

この頃は千代田区も特別支援教育のシステムを少しずつ変えようとしていた時期だったそうです。区内のいくつかの小学校で支援学級だけでなく、通級クラスが置かれるようになったのも、この時期だったと聞きます。僕も、通常学級では支援員の先生をつけてもらうなど、さまざまな面で学校にお世話になりました。

でも、字がうまく書けない、計算ミスが多い、忘れ物が多い、宿題や課題をこなせない、自分の気持ちを人に伝わるように話せない。学年が上がるにつれて学習障がいの傾向もどんどん強くなっていきました。

僕は、社会の科目は誰よりも得意でした。でも、漢字を間違ってばかりでテストはいつも×。算数の科目も学年が上がれば上がるほど、点数が減っていく一方。

テストを見た父は、どうしてこんなかんたんな計算も間違うのかと怒鳴ります。でも、僕にもうまく答えられません（ちなみに、「どうして」「なぜ」という問いは、発達障がい児には不適当な言葉だそうで、父は当時の言動を後悔しているとのことです）。

黙ってしまったり、理由にならない答えを返したりする僕に、また苛立つ父。悪循環で、この頃のわが家の雰囲気は、とてつもなく重苦しく、どんよりとしていました。そして、こんな雰囲気になるのは自分がいるからだと、僕の自己肯定感も最悪でした。

東大が当たり前の家に不良品で生まれた僕。感情面でもクラスメイトとうまくつき合えずに周りに迷惑をかけてばかり。友達もいない。

小学校3年生のこの頃から、生きる意味が分からず、毎日死ぬことばかり考えるようになりました。自分の部屋のパソコンで死に方を調べたり、ひもで首を絞めてみたり。でも、生きる意味さえ分からないうちに、死ぬ意味も分からない。こんなことが頭をよぎっては、思いとどまるといったことを繰り返しました。

そんな毎日を送りながらも、何とか小学校を卒業する日を迎えました。実際には学校内外でたくさんの方に支えてもらっていたのですが、当時の僕には理解、ましてや感謝する余裕などありませんでした。心身ともにヘトヘトで、ライフポイントはゼロ寸前でした。

死を考える毎日で麹町中学校校長・工藤勇一先生と出会えた幸運

当時の千代田区の区立小学校には越境入学してくるような教育熱心な家庭の子どもが多く、中学受験をするクラスメイトがたくさんいる環境でした。

周囲のみんなが有名な中高一貫校を受験する中で、公立小学校すらまともに入れない発達障

がい児を受け入れてくれる私立中学校などはあるわけがないと、僕はイートン校の受験資格を使うのはもちろんのこと、中学受験を一切せずに、区立中学校へ進学することにしました。

千代田区の区立中学校には中高一貫で入学試験がある九段中等教育学校のほか、試験がない神田一ツ橋中学校、麹町中学校の３校があります。

千代田区は学区制がなく、希望した中学校に入学できました。生まれたときから選択の余地すらなかった僕にとって「選んでいいよ」と言われたことは、特別にうれしいことでした。

各学校に個性があり魅力があります。どの学校がよいか決めかねていた中、両親が麹町中学校の保護者向け入学説明会に出席します。

そこで登壇されたのが、校長就任初年度をまもなく終えようとする工藤勇一先生でした。工藤先生は、麹町中学校に入学してくるのは私立の受験競争に敗れた子どもが多いこと、傷ついた子どもをいやすのは学校や教師ではなく、子どもが自分で成長して乗り越えていかないといけないこと、学校は全力でその手伝いをすると語られたそうです。

両親ともに工藤先生の話に非常に感銘を受けたらしく、熱心に僕に麹町中学校をすすめました。僕もそんなに素晴らしい校長先生がいる学校ならいってみたいと思いました。

これが僕の人生を大きく変えるできごとになるなんて、あの頃はまだ何も分かりませんでした。

工藤先生は最初から最後まで規格外の校長先生でした。

大きなスクリーンの前でパワーポイントを使いながら全校生徒に話す校長先生なんて初めて見ました。しかも、入学式から。

就任前にリストアップしていた３５０項目の改善点を、一年目でほとんどは改善できたこと。でも、まだ本当にやりたいことは改善できていないから、これからもっと改革を進めたいこと。

一人ひとりの生徒に呼びかけるように話す工藤先生の姿が、今でも強烈に目に焼きついています。

「君たちは僕のもとで麹町中学校の生活を３年間送る初めての生徒たちだ。一緒に学校を変えていこう！」

いつも邪魔者扱いで校長先生から一緒に何かをしようと呼びかけられたことなど、一度たりともなかった僕は、雷に打たれたような衝撃を受けました。目いっぱい詰め込まれた知識が頭の中で、一瞬でフル動員されます。

「こ、これこそ世界のＴＯＹＯＴＡが生み出した『ＫＡＩＺＥＮ』と『ＫＡＩＫＡＫＵ』。ＴＯＹＯＴＡの生産方式を発案し、ボーイング社が、２０００年代初めに『７７７』『７８７』

といった機体の最終組み立て工程に採用した『大野耐一先生のスピリット』がここにある……」

感動で震えが止まりませんでした。

すべての発達障がいの人に知ってほしい、工藤先生のもとで編み出した「自己変革」のためのメソッド

駅の構内で、「たった一発で人生はこわれる」「つい、カッとなった。人生、ガラッと変わった」という暴力行為防止ポスターを見かけたことはありませんか？

日本民営鉄道協会の調査によると、２０２０年度は全国37社局で３７７件の暴力行為が駅や車両内で起きたとあります。日本全体で数えたら、毎日どれだけの暴力事件が起きて、取り返しのつかないことになってしまった人がいることでしょう。

勉強ができないとか、コミュニケーションがとれないといった問題が僕にはたくさんあります。でも正直に言えば、それらは「些細」な問題です。周囲の人や親はもちろん、何よりも僕自身がいちばん困っていたことは、感情のコントロールができないことで引き起こす、突発的

な暴言や暴力行為でした。

かっとなると手がつけられなくなる。巨大な怒りの波におぼれて、のみこまれていくような感覚です。

ここまでいくともう自分で止めることはできません。周りの音も聞こえません。頭の中は真っ白で、目に映るものはサイレント映画のコマ送りのようにゆっくりとした、妙に静寂な世界に変わるのです。

自分を取り戻したときに、そこですべてを悟ります。

また、やってしまったと。

後悔してももう遅いです。怒る前の世界に戻れないのですから。どうしてこんなことをしてしまうのか、親や先生に何度も聞かれましたが、僕自身も分からないので答えられません。むしろ、僕のほうが教えてほしいくらいです。

感情にのみこまれることで、周りの信頼をなくし、自己評価もどんどん下がり続けます。

これさえなければ。何度も何度も後悔しました。でも、「かっとなったら10秒数えなさい」などという、一般的なテクニックでおさえられる程度の感情ではないのです。

発達障がいの人、特にＡＤＨＤの傾向のある人は喜怒哀楽すべての波が異常に大きいといわれます。

僕も大きく感情が揺れ動きます。うれしいと地べたを転がりまわりたいくらいに、怒ると世界中を爆破したいくらいに、悲しいと自殺してしまいそうなくらいに、楽しいと夢中になってよだれをたらしてしまうくらいに。正直、ヤバイ人です。

しかし、怒りをコントロールできなくては、社会に適応できません。僕は、自分の最大の短所であり難関である「怒りの感情のコントロール法」を身につけなくては、自分を自分で信じられる日はこないと感じていました。

そして18年間かけて、僕はようやくその方法を生み出すことができました。きっかけは、麹町中学校で工藤先生に学んだことです。

麹町中学校を卒業後、僕は英国にある帝京ロンドン学園に留学し、現在は帝京大学の法学部政治学科に入学し、大学生活を送っています。

ＡＤＨＤにＡＳＤ傾向、そこに学習障がい（ＬＤ）のおまけつきという、うれしくないハイブリッドでできあがっている不良品の僕ですが、もう授業中に教室を飛び出したり、他人に暴

力をふるったりすることもありません。

それどころか、人と目を合わせることも怖くなくなり、大学では授業で気になることがあれば先生に話しかけ、鉄道という共通の趣味でつながるよき友人もできました。大学の授業はとても興味深く、落ち着いて取り組んでいます。

まだとんちんかんな受け答えをして失笑も買うし、入学早々単位の取り方を失敗してしまうわ、漢字も相変わらず苦手ですが、それで自信をなくすことはなくなりました。あんなにひどかった忘れ物もほぼゼロ。忘れ物をしても、パニックにならずにどうしたらよいか判断することができます。

現在は実家で家族と同居していますが、毎朝6時には自分で起き、片道1時間以上かけて電車通学します。父とは時々ぶつかりますが、こちらも対処方法が分かるので、さほど時間もかからずに自分の力で落ち着けます。

先日、こんなことがありました。

大学の授業の一環で、学生がグループに分かれて課題に取り組みました（以前の僕なら、グループ学習自体が苦手だったのに）。僕は、課題のデータを小型のハードディスクに入れて、

いつも持ち歩いていました。ここには、大好きな鉄道や今までの旅行の画像、高校時代の学習のデータなどもすべて入っていました。

ところが、同じグループの人が授業中に僕のパソコンを触った後、ハードディスクがなぜかまったく起動しなくなってしまったのです。

命の次に大切にしていた画像（特に鉄道と艦船！）がすべて失われた瞬間でした。

僕はあまりのショックでふらふらになって帰宅し、その日は夕食も食べずに寝込みました。でも、翌朝にはどうやってデータを復旧するかに気持ちを切り替えていました。調べると、２０１１年の東日本大震災で津波の被害にあったパソコンのデータを復旧させた会社があったので、そこに依頼しました。

可能性は半々といわれ、データが復旧するまで2週間以上かかりましたが、不安で頭がいっぱいになることもなく、通常どおりの生活を送りました。

昔の僕だったらハードディスクが壊れた原因が何であれ、おそらく大暴れ。もう18歳を過ぎているので、警察を呼ばれて、下手したら逮捕されていたかもしれません。でも最悪の事態は起こりませんでした。

小・中・高時代の先生や同級生が聞いたら、嘘だろ？　あの西川が？　と言うと思います。

誰よりも、自分がいちばんびっくりしているのですから。

ここまでに、苦労も困難も山ほどありました。トライアル＆エラーを重ね続け、進歩が見えない時期のほうが長かったように思いますが、それでも少しずつ前に進めた理由。

すべては、麹町中学校の３年間で工藤先生の背中から教わったことが出発点でした。

「３重苦」だったヘレン・ケラーは、サリバン先生に出会って「Water」という言葉を手のひらに書いて教わるまで、真っ暗闇の世界で生きていたといいます。

僕には、ヘレン・ケラーの気持ちが分かる気がします。他者の気持ちも分からず、自分の感情もコントロールできず、しかも説明すらできない。混沌とし、恐怖そのものだったこの世界。

それが、麹町中学校でもがき苦しみながら世界の輪郭をつかみ、帝京ロンドン学園の３年間で試行錯誤をしながら学び体験し、少しずつ自分に合う生き方が分かってきました。

ヘレン・ケラーを目覚めさせた「Water」という言葉は、僕にとっては工藤先生の「自律」という言葉でした。

工藤先生は、「自律した生徒を社会に送り出すこと」を教育のいちばんの目的とされています。「自律」というのは「自分で考え、判断し、行動できる」ということです。事実、麹町中学校

での教育目標は「自律」「尊重」「創造」です。工藤先生がもっとも重視していたのは、生徒一人ひとりが当事者意識でものごとにあたる意識をもつということです。

僕は、帝京ロンドン学園の３年生に進級する直前の２０２０年３月に日本に一時帰国して以降、コロナ禍で学校に戻れなくなりました。その後は東京でイギリス時間に合わせ、昼過ぎから夜にオンライン授業を受ける毎日。後で詳しく述べますが、目標としていた英検２級にもなかなか合格できず、当時は大学入試改革の真っただ中だったことで大学受験もどうなるのか分からない状況でした。

工藤先生から自律という考え方を学んでいなければ、きっと不安に押しつぶされていたでしょう。発達障がいの自分をこの世に生み出した両親を憎み、コロナに振り回される自分を被害者と受け止め、何もかも周りのせいにして、社会や国を恨んでいたと思います。

でも、今の僕は社会の一員で、人生は他人から与えられたり押しつけられたりするものではなく、自分の選択と行動でつくりあげるものだと考えています。

どんなにダメな自分でも、自分の取扱説明書を自分の力でつくりあげることが可能なのです。

10年前の僕を思い出しながら。今現在、死にたいと悩み苦しんでいる日本のどこかにいるも

う一人の僕に向けて。

18年間、悩み続けて見つけた中から、人の役に立てるものがあるかもしれない。

英国から帰国後、人並みに落ち着いた生活を送れるようになった自分に少しおどろきつつ、同じような悩みをもつ誰かのためになれたら。そんなことを思うようになり、本書の執筆に挑むことにしました。

つらくてつらくて、今にも押しつぶされそうな昔の自分と、何度も何度も向き合う苦しい作業を繰り返しながら書いています。

自分や他人を傷つけるためではなく、自分を守るための武器のつくり方と使い方をこの本で思いつく限り公開します。もし、同じ悩みをもつ人の役に立てることがあれば、最高にうれしいです。

西川　幹之佑